

厩舎に住みつく野良猫が、最長老のトパーズミオに「おはようございます」



ブレイメンの丘

走り終えて

1

登別市富浦の「オーシアンファーム」(大井昭子さん経営)は、引退した競走馬のオアシスだ。かつて軽やかに駆け、ファンを沸かせた馬たちが、飼い主からの仕送りと、大井さんら女性ばかり三人の世話で、静かに余生を送っている。三人はこの牧場一帯をタリム童話「ブレイメンの音楽隊」にちなんで「ブレイメンの丘」と呼ぶ。今年の主役・馬と人とのふれあいを求めて、丘を訪ねた。

(文・松浦 真一記者、写真・河野 正敏記者)

太鼓を打ち鳴らすような音で目が覚めた。まだ薄暗い午前六時半。厩舎(きゅうしゃ)の馬たちが朝食をねだって、ハメ板をけり上げているらしい。簡易ホテル代わりに、厩舎わきに置いてある貨車から起き出してみると、朝日が眼下の太平洋を黄金色に染めていた。

厩舎では、大井昭子さん(66)、町みどりさん(66)、矢野千香子さん(66)の三人が、もう作業を始めていた。馬たちは飼料(かば)おけに顔を突っ込み、フスマやオカラ、刻んだニンジン、リンゴの混じったえさを一心不乱に食べている。トタン張りのがらんとした建物なのに、馬の体温のせいか暖かく、吐く息が白く見えない。このぬくもりを頼って、野良猫の家族が住みついているという。大井さんが、登別の温泉街からはど近い、この丘の上にオーシアンファームを開いたのは、昭和六十三年六月。日高管内浦河町で父親の代から五十年近く営んできた馬の生産牧場を、引き払ってきたのだった。

ゆったりと充実の時

冬の一日

大井さんの手は、節くねだって、ゴツゴツしている。「素手じゃないと、馬の微妙な体調変化などは分からない」という大井さんは、生産牧場時代、その手で多くの名馬を育て上げた。昭和二十八年のダービー馬のボストニアもそうだし、シンザンやハイセイコーなどともに「競馬の殿堂」に入っているハクチカラもそんな一頭だ。

しかし、年を経るにつれて、二十六月の出産シーズンには一時間置きに起きて馬の様子を見るような生産牧場生活がなくなってきた。「人間と馬がもっと安らげる生活をした」。それは、若い時からほんやりと抱えていた夢でもあった。そして五十七年に牧場の形態を、養老型(ようろうがた)に切り替えた。登別に移ったのは、気候の面でも交通の面でも、老いた馬や人間にとってよりよい土地を求めたことだった。

シャッターが開けられ、冷気の中、十三頭の馬たちが一頭ずつ放牧されていく。ばらばらになつて、雪の牧場をゆつくり歩く。隣の生産牧場で跳びはねる当歳の若駒(こま)とは対照的だ。

動く三人ものんびりとくつろぎ、時間がゆったり過ぎていく。

午後二時半、雪が降り出し、馬は厩舎へ。最高齢の二十九歳、人間でいへば百歳以上のトパーズミオの背に、大井さんが暖かそうな布を優しく掛け。